草子本『さんせう太夫物語』に見る寛文期草子屋の活動

林　真人

要　旨　草子本『さんせう太夫物語』は、五説経の一つ、「さんせう太夫」の正本を草子化して刊行された本である。草子屋の主導によって作られたこの本の本文は、諸本中現存最古の与七郎本と極めて近い内容を持つ現存しない正本に拠ったものと考えられるが、本としての形式面においても、内容面においても、舞台上の語りを文字化したとされる正本とは異なる性格を付与されている。また、この本の挿絵は、本文の親本とは別の現存しない本を典拠にしていると考えられる。草子本『さんせう太夫物語』は、寛永期説経正本の面影と寛文期の草子屋の活動の一端を同時に垣間見ることのできる本なのである。

一、草子本の書誌

語り物の芸能であった説経は、中世期には既に盛んに行われていたにもかかわらず、室町後期以前の古いテキストは現存しない。本論で取り上げる「さんせう太夫」に至っては、江戸時代に入ってからの版本しか残っていないのが実情だ。

説経のテキストの多くは、浄瑠璃と同様、「正本」の体裁を採る。「正本」とは、説経や浄瑠璃の太夫が語った内容を一字一句誤りなく写し取ったことを標榜する本のことである。その多くが、「〇〇太夫正本」などと太夫の名を記し（単に「太夫正本」とする場合もある）、節章を付す。近年の研究によって、正本は必ずしも太夫の語りをそのまま反映したものでないことが明らかにされてきているが[1]、そのような建前と体裁が整っていたことは確かである。

一方、本論で取り上げる『さんせう太夫物語』（以下、草子本）は、五説経の一つ「さんせう太夫」の物語を語る本ではあるが、正本ではない。太夫の名も記されなければ、節章も付されない。それどころか、本文のどこを見ても「説経」という一語すらない。次に、この本の書誌を記す。四角は欠字を、四角で囲んだ文字は欠字を私に補った箇所である。

【数量】上中下三冊。【装訂】袋綴。【表紙】藍色、唐草万字つなぎ文様。【寸法】縦二六・九糎、横一八・六糎。大本。【匡郭】四周単辺。縦一九・七糎、横一五・三糎。【題簽】（上巻）「（ゑ）入さんせう太夫上」、（中巻）「（ゑ）□さんせう太夫中」、（下巻）欠。【内題】「さんせう太夫物語上（中・下）」。【丁数】（上巻）十六丁、（中巻）十六丁、（下巻）十四丁半。【行数】十四行。【字数】一行あたり約二十七～三十一字。【柱刻】「さんせう太夫上（中・下）丁付（上巻）、欠、

二〜十六、（中巻）欠、二〜十六、（下巻）一〜十五」。【挿絵】墨印。全二十一図。（上巻）六図。二ウ三オ見開き、五ウ、八ウ九オ見開き、十一オ、十三オ、十五ウ。（中巻）八図。二ウ、三オ、五オ、七オ、九オ、十一オ、十三オ、十五ウ。（下巻）七図。一ウ二オ見開き、四ウ五オ見開き、七オ、九オ、十ウ、十二オ、十三ウ十四オ見開き。【版元】鶴屋喜右衛門（江戸の出店か）。【刊年】不明、寛文頃か。【所蔵者】（上巻）個人蔵、（中・下巻）大阪大学附属図書館赤木文庫。

赤木文庫蔵の中・下巻は『説経正本集』に翻刻がある。近年新出した上巻については本論の翻刻・図版編に掲載する翻刻が初出となる。

書誌を見ると、先に指摘した諸点以外にも、この本が正本とは異なる特徴を持つことが分かる。まず、当時の正本のほとんどが中本、あるいは半紙本であるのに対し、草子本は大本である。また、寛文期の正本の多くが十六〜十七行であるのに対し、草子本は十四行である。なお、正本が出版され始めた寛永期には十三行〜十四行本が多い。古浄瑠璃や説経の正本は、当時の出版物として大衆向けの分野である「草子（あるいは草紙）」の中でもさらに一段格下とみなされており、比較的安価で売られていたと考えられる。そして、その版元は「草子屋」あるいは「浄瑠璃屋」と呼ばれ、医書や漢籍など、「物之本」と呼ばれる分野の本を出版する「物之本屋」とはっきり区別されていた。(2) 鶴屋喜右衛門は寛永八年に現存最古の説経正本である『せつきやうかるかや』を出版した時点で「しやうるりや」を名乗り、後には「さうしや」とも名乗る、いわば草子屋の老舗である。草子屋たちは正本を安価にするため中本や半紙本などといった比較小さなサイズで本を作り、さらに、徐々に行数を増やしていったのである。それに対し『さんせう太夫物語』は、草子の中でも正本より格上の仮名草子などと共通する版式を持った、まさしく「草子本」なのである。

二、草子本本文の古態性と特殊性

第一節　草子本本文の古態性

本章では「さんせう太夫」諸本中現存最古、寛永年間刊と見られる天下一説経与七郎正本『さんせう太夫』（以下、与七郎本）との比較を中心に、草子本本文の特徴をとらえていく。

与七郎本は上中下三巻一冊の中本で行数は十四行、巻頭や巻末などに欠丁があり、二十八丁が現存しているが全体の三分の一程は欠けていると思われる。

新日本古典文学大系『古浄瑠璃・説経集』（信多純一・阪口弘之校注、岩波書店、一九九九年）では、与七郎本を底本として「さんせう太夫」の本文が作成され、その欠丁部は草子本によって補われ、さらに草子本の破損部は明暦二年刊佐渡七太夫正本『せつきやうさんせう太夫』（以下、明暦本）の本文によって補われている。阪口弘之氏はその解題において次のように述べている。

草子本は寛永頃の面影をよく残すもので、底本（与七郎本、筆者注）とはきわめて近い本文をもつ。これまで上巻が知られず、当該作（さんせう太夫、同）読解は、数種の正本本文を組み合せた複雑な校訂本文に拠らざるを得なかったが、今回の上巻出現で、寛永期本文がほぼ復原できた意義は大きい。

筆者は草子本に対する認識を、概ね阪口氏のこの指摘と同じくする。以下、草子本本文と与七郎本本文の「近さ」について検証していく。ただし、両本を直接比較するのではなく、明暦本、寛文七年刊正本『さんせう太夫』（以下、寛文本）を比較対象に加える方法を用いる。それは、両本本文の「近さ」とは相対的なものだと考えるからである。

明暦本は山本九兵衛から刊行された正本で、中本一冊の十四行本である。その本文は与七郎本の本文を適宜省略することで成っている。その省略の方法とは、きわめて単純な切り貼りであるため、「貼られた」箇所は与七郎本に対してきわめて忠実である。[3] 従って、与七郎本の欠丁部についても、明暦本にある本文は必ず与七郎本にもあったと考えることができる。しかし、省略によって物語上重要な要素が失われることも多い。以下に、その実例をあげる。明暦本が本文を省略している箇所は「▼」によって記す。

与七郎本

もつたるかいにてうちふせ、ふなはりにゆいつけて、ゑそがしまへぞうつたりけり、ゑそがしまのあきひとは、のふがないしよくがないとて、あしてのすぢをたちきつて、ひに一がうをふくして、あわのとりをおうておはします、これはみたいの御物かたり、さておき申、ことにあはれをとゞめたは、さてみやさきの三郎か、きやうたいの人々を、二くわん五百にかいとつて（上九ウ、十オ）

草子本

もつたるかいにてうちふせ．ふなはりにゆいつけて．ゑぞがしまへぞうりたりける．ゑぞがしまのあき人は．のふがないしよくがないとて．あしてのすぢを立きりて．日に一がうのしよくをぶくし．あはの鳥をおふておはしま

す．これはみだい所のなれのはて．ことにあはれをとゞめしは．みやざきの三郎が．きやうだいの人々を二くはん五百にかいとりて．（上十一ウ、十二オ）

明暦本

もつたるかいにて、打ふせける、ことにあはれをとゝめたは、みやざきの三郎か、兄弟の人々を二貫五百にかい取て（上七オ）

これは、直江津で山岡太夫に騙されたつし王一行が二手に売り分けられる場面である。与七郎本や草子本には、つし王の母が蝦夷へ売られたと明記されているが、明暦本ではその記述が省略されている。続いては、さんせう太夫によってつし王姉弟が松の木湯船に監禁される場面である。

与七郎本

松のきゆ舟のそのしたて、としをとらする、きやうたいのくとき事こそたうり也、フシあらいたはしやなあねご様は、つしわうとのにすかりつき、やあいかにつしわう丸、われらか国のならひには、六月つもごりに、なごしのはらいのわにいるとはきひてあれ、これはたんこのならいかや、さらばしよくじもたまはらす、ほしころすかやかなしやと、あねはをとゝにすかりつき、をとゝはあねにたきつきて、りうていこかれて、おなきある、大夫殿五人御さある、二はんめの二郎殿と申は、じひたい一の人にて御ざあるか、ぬしのおまいりあるはんを、すこしつゝおわけあつて、きよいのたもとにおいれあり、ちゝはゝきやうだいのめをしのび、よる〳〵はまぢへおさがりあつて、

松のきゆふねのそこをほりぬいて、しよくじをかよはしたまはつたる、二郎殿の御をんをば、ほうしかたふぞおぼへたり、コトハ大夫はきのふやけふとはそんすれとも、はや正月十六日にまかり成（中四ウ、五オ）

草子本

松の木ゆぶねの其したで。としをとらする、きやうだいの。くどき事こそあはれなれ。あらいたはしやあねごせんは。つしわう殿に、すがりつき。やあいかに、つしわう丸。われらか国のならひには。六月つごもりに。なごしのはらへの、わにゐるとこそ聞たるに。これはたんごのならひかや。さらばしよくをも給はらず。ほしころすかやかなしやと。たがひに、てにてをとりくみて、りうていこがれ給ひけり。五人ましまし、子共たちの中に。二郎殿と申は、じひふかき人なるが。ぬしのおまいりある、いひを。少つゝ、わけ給ひて。人めをしのび、よる〳〵は。はまぢへさがり給ひて。松の木ゆぶねの、そこほりぬきて。しよくをかよはし給りたる。二郎殿の御おんどく。ほうじがたくぞ、おほえける。されば、ひまゆくこまのあし。はやくもきたる春立て。正月十六日になりにけり。（中四オ、ウ）

明暦本

松の木ゆ舟の其下て、としをとらする、兄弟のくとき事こそたうりなれ、フシあらいたはしや兄弟、りうていこかれておなき有、ことは太夫は、きのふはけふとそんずれ共、はや正月十六日に成（中十一ウ、十二オ）

与七郎本、草子本では、太夫の二男・二郎が家族郎党の目を盗んで運んだ食料によって姉弟が命をつないだ様子が

描かれている。明暦本はここも省略している。この二郎の慈悲は、後に出世したつし王がさんせう太夫に復讐を果たす場面で、二郎に太夫の首を鋸で挽くことを免れさせ、太夫の所領の半分を賜るきっかけのひとつとなるのだが、明暦本では省略によってその根拠が薄弱になってしまっている。

このように、明暦本では物語上重要な場面も省略されてしまう傾向がある。それに対し、草子本にはそのような場面が残されており、明暦本よりも寛永期の「さんせう太夫」の姿をよく残しているといえるのである。

続いて、寛文本との比較を行う。寛文本は山本九兵衛から刊行された半紙本で、六段一冊の構成になっている。本文の行数は十七行で、全十九丁半である。万治年間以降、説経正本の多くはこのような浄瑠璃風の六段本になっていく。先行する本との違いは構成面に留まらず、この寛文本の場合、物語の内容面の変化が後半部になって顕著に表れる。

与七郎本

しゆくをくりむらおくりして、なんほく天わうしへぞひいたりけり、あらいたはしやつしわう殿は、いしのとり井にとりついて、ゑいやつといふておたちあれは、御だいじの御はからいやら、又つしわう殿の御くわほうやら、こしがたゝせたまひける（下五オ）

草子本

しゆくをくり、むらをくりして。天わうじへぞ引にける。いたはしや、つしわう殿は。石のとりゐに、とりつきて。ゑいやつといふて、たち給へば。御たいしの、はからひにや。又、つしわう殿の、御くはほうやら。こしが、

たゝせ給ひける。（下二ウ）

寛文本

あらいたはしや若君は。ごんげんだうにましますか。かわごの内のつかれかや。又せいもんのばちにもや。こしがいさせ給ひけるが。よもすがらごんげんに。きせいをかけさせ給へは。程なくげんにつ□せ給ふ（第六段）

これは国分寺の聖に匿われながら京に着いたものの腰が立たなくなっていたつし王の腰が立つ場面でである。与七郎本と草子本では、つし王は四天王寺の石の鳥居にすがりついて腰が立ったと記されているが、寛文本では朱雀権現に起誓をかけたことによって腰が立ったとされている。そして次にあげるのは、つし王が清水観音の夢告を受けた梅津の院に見出され、養子に選ばれる場面である。

与七郎本

はや三日と申には、な□□□□うしへおまいりあるか、あらおもしろの花のけしきやと、さしき□□□□□、おとをりありて、百人のちこわかしゆうを、かみからしもへ、三へんまで□らんつれ共、やうしになるべきちこはなし、むめすのゐんは御らんじて、は□かのしもにおはします、つしわうとのゝひたひには、よねといふじか三□りすはり、りやうかんに、人みか二たひ御さあるを、たしかに御らんして、そ□かしがやうしに、おちやにきうじを、それかしにたまわれとの御ぢやう也（下六オ）

草子本

はや三日と申には。大ざか天わうじへ、まいり給ふ。あらおもしろのはなのけしきやと。ざしきになをらせ給ひて。百人のちごたちを。かみからしもへ御らんずれども。むめづ殿のやうしになるべきちごはなし。はるかのしもをみ給へば。つしわう殿は、ひた いには。よねといふじが、三つすはり。りやうがんに、ひとみが二たい、御ざあるを。たしかに御らんなされつゝ。それがしがやうしには。はるかのしもに、おはします。おちやのきうじを給はれや。（下三ウ、四オ）

寛文本

むめづ夢さめかつはとをき。あら有がたの次第とて。左のかうしをみ給へは。何うたがひの有べきぞ。つしわう殿のおはしますが。両かんに人見四たい立給ふを御らんし。むめづなのめに思召。つしわう丸をともなひ。やかたに下かうと聞へける。（第六段）

これも、与七郎本や草子本では天王寺という場で起こる出来事が、寛文本では別の場、この場面では夢告を受けた清水寺でそのまま起こる流れになっている。

つし王再生の場としての天王寺、及び石の鳥居の重要性は既に多くの先学によって指摘されているところである。[4] 説経の浄瑠璃化という流れの中で生まれた寛文本は、「再生の場＝天王寺」を語らない本であって、寛永期の「さんせう太夫」の姿を残しているとは言い難い。この点においても、刊行された時期は寛文本とごく近いと考えられるものの、草子本の方がより寛永期の与七郎本と近しい本文だと言えるのだ。

第三節　草子本と与七郎本本文の異同

以上のように、草子本の本文は他の諸本と比べて与七郎本と近しいものであった。しかしながら、与七郎本本文と草子本本文との間には異同も多い。以降は両本の間にいかなる異同があり、それが何に起因するのかを考察してゆく。

まず、一つの結論を言えば、草子本は与七郎本の本文を直接の典拠としているわけではないと考えられる。その最も大きな根拠となるのは、横山重氏が既に指摘するところではあるが、[5] さんせう太夫がつし王姉弟を買った時の買値に関する記述である。

与七郎本

さてもなんちらは、十七くわんでかいとつて、また十七文ほともつかわぬに、おてうと申よな（中三オ）

草子本

さてもなんぢらは。それがしが、十三ぐはんでかいとりて。まだ十三文ほどもつかはぬに。おちんと申よな。（中二オ）

なぜこの箇所が草子本の典拠する本が与七郎本でないと言える根拠となり得るのかは、その他の異同について述べ

た後、論証していく。

両本間において顕著な異同の一つは、与七郎本に多く見られる説経特有の言い回しが草子本にはほとんど見られないことである。その代表的なものが命令表現と敬語表現だ。

与七郎本　山からすぐにをちさいよ、おちてよにでゝめてたくは、あねがむかいにまいらひよ（中一ウ）
草子本　山からすぐに、おち給へ。おちて世に出てめでたくは。あねをむかひに、きたるべし（中一ウ）

与七郎本　けいづのまき物をおもちあれば（中二ウ）
草子本　けいづのまき物をもち給へば（中一ウ）

与七郎本　きやうだいつれたちて、大夫殿におまいりある（中二ウ）
草子本　きやうだい、つれだちて。たゆふ殿にまいらるゝ（中二オ）

与七郎本に見られる「をちさい」、「まいらひ」などといった、「～さい」、「～い」型の命令表現や、「おもちある」、「おまいりある」など「お～ある」型の敬語表現は、初期説経の特徴的語り口として知られているが、万治年間以降の正本では用例が激減していく。その原因は、それらの表現が中央語として衰退したことと、説経の浄瑠璃化にあると考えられている。[6] 与七郎本では十一例見られた「～さい」、「～い」型の命令表現が草子本では一例も見られなくなり、百例以上見られた「お～ある」型敬語表現も僅かな例外を除いてほとんどが「～給う」などといった一般的な表

現に書き換えられている。ただし、語りの反映を標榜しない草子本においては、その原因について別の事情も考える必要があるだろう。

次に指摘する両本間の異同は、物語の冒頭部である。与七郎本は上巻冒頭部が欠けているが、柳亭種彦の『用捨箱』に初丁表の模刻が掲げられている。そしてそれは、明暦本冒頭部と完全に一致する。よって、ここでは明暦本と草子本の本文を比較する。なお、明暦本の太字で示した箇所が『用捨箱』によって確認できる与七郎本の本文である。

明暦本　たゝいまかたり申御物かたり、国を申さは、たんこの国、かなやきぢざうの御本ぢを、あら〳〵ときたてひろめ申に、これも一たひは人げんにておはします、人げんにての御ほんぢをたつね申に、国を申さは、あうしう、ひのもとのしやうぐん、いわきのはんぐわん、まさうぢ殿にて、しよじのあはれをとゝめたり（上一ウ）

草子本　そも〳〵たんごの国。かなやきぢざうの御本ぢをくはしくたづね奉るに、国を申せばむつのくに。ひのもとのしやうぐんいはきのはんぐはんまさうぢ殿の。まぼり本ぞんと聞えける。（上一オ）

金焼地蔵の本地を語る一連の本文が与七郎本と明暦本で同じものであったと考えるならば、与七郎本にもつし王姉弟の父である岩城判官正氏こそが金焼地蔵の本地であると語られていたはずである。しかし、明暦本の末尾部（与七郎本末尾部は欠丁）での正氏についての言及は、「日向を隠居所とした」というものにとどまっており、冒頭部との不一致が生じている。一方の草子本では、金焼地蔵の本地は正氏の守り本尊の地蔵像であるとされる。この地蔵像

は草子本末尾部で、安寿の菩提を弔うために建立された御堂に安置され、「金焼地蔵」として人々に崇められたとあるので、冒頭部との間に矛盾はない。しかし、「本地」とは本来、仏が仏となる前の人間としての姿を指す語であり、草子本のこの構造は本地物として特殊だと言える。

次に、両本の道行文の異同について述べる。さんせう太夫のもとから逃げ出し、国分寺の聖に匿われたつし王が、人目を忍ぶために聖の背負う皮籠に入って、丹後の国分寺から京の朱雀権現堂まで至るというのが両本に共通する道行の展開である。それぞれの道行文を全文掲げる。太字で示したのは地名である。

与七郎本

たんこの国をたち出て、**いばら・ほうみ**はこれとかや、**かまだに・みぢり**をうちすきて、**くない・くわた**はこれとかや、**くちこぼり**にもきこへたる、花にうきゝ**かめ山**や、としはよらぬと**おもひの山**、**くづかけたうげ**をうちすきて、**かつらの川**をうちわたり、**せんしやうし**、**八ちやうなわて**をうちすぎて、おいそきあれはほとはなし、**みやこ**のにしにきこへたる、**にしの七でう**、**しゆしやか・ごんげたう**にもおつきある（下三ウ）

草子本

こくぶんしを立出て。八こゑのとりのこゑ〳〵に。かげもかすめるあり明の。月のゆくゑを、ながむれば、かゝれる雲をふきはらふ。かぜもわたりの、さとをすぎ。**たんご**、**たんば**のさかいなる。**おにがじやう**と、きくからに。ものおそろしく、すさまじや。みちのわか草、わけゆけば。をきあまりたる。しらつゆは。かけしころもの玉かとよ。山なか三里をすぎゆけば。こぞののこりの、しろたへは。はつざくらかと、みねのゆき。せおふもおもき、つゞらおりの。道ゆく人のおとづれも。たえてほどふるはるの雨。ころものそてやぬらすらん。さととをげなるか

ねのこゑ。かすかに、おとするものとては。みねにさはたる、さるのこゑ。せうか、ぼくてき、かんこ鳥。みたにの水の、おとならでは。みゝにさえぎる、ものもなし。なをゆくさきのみちすぢを。**みをがたうげ**にせきすはる。せきもりは、これをみて。ひじりのせなかに、おひたるは。何ぞとこそは、とがめけれ。ひじり少もさはかずし。さん候これは。たんごの国、こくぶんじのほんぞん。あまりにふるひ給ふゆへ。みやこへさいしきにのぼる也。さてはくるしからずとて。せきのとあけてぞとをしける。せきしよのまへを、うちすきて。の山おろしの、ふくおとも。たかぞとはを、うちながめ。ころものそでは、あめつゆに。**くちこほり**にも入ぬれば。さえかへりたる、くもまより。ふらすあられのたまさかに。あへるうき木の**かめ山**や。われはかはごを**おひのさか**。**くつかけたうげ**を、うちすぎて。かげもおぼろにうつるなる。月の**かつらの川**せぶね。こぎゆくあとのしらなみは。花かとみえておもしろや。いそぐこゝろのほどもなく。**せんじやうじ**、**八でうなはてを**、ゆきすぎて。**みやこ**のにしにきこえたる。**七でう**、**しゆしやか・ごんげんだう**に、つきたまふ（中十五オ十六オウ）

与七郎本の道行は、短い詞章ながら、次々と地名が挙げられており、二重傍線部に示した如く「これとかや」「うちすぎて（うちわたり）」といった語句が頻出している。寛永期の説経正本の道行において、このように次々と地名が配されることについて角田一郎氏は、「寛永期の浄瑠璃道行一般と基本形式を同じくしていることにほかならない」[7]としている。また、特定の語句の頻出については、同時期の古浄瑠璃の道行と同日に論じ得ない説経の道行の特性であると述べておられる。次にあげるのは、慶安元年刊の『せうきやうしんとく丸』の第一道行・第七道行である。

『せつきやうしんとく丸』上巻

おとおりあるはとこ〳〵ぞ、うへつけなわてはやすきて、さくらこうりはこれとかや、ほらがたうけおはやすきて、やわたの山はこれとかや、よどのこはしお、たどろもどろとふみわたり、ふしみのさとはこれとかや、三十三けんふしおかみ、おいそきあればほどもなく、ひかし山清水ぢにおつき有

『せつきやうしんとく丸』下巻

とおらせたまふはとこ〳〵ぞ、なからのはしおうちわたり、さきおいつくとおとい有、大由のしゆく、ちりかきなかすあくた川、さきおいつくとおとい有、また夜はふかきたか月や、すへおいつくとおとい有、すへは山さき・たから寺、せきとのいんおふしおかみ、とはにこひつか・あきの山、おいそきあればほともなく、ひかし山・きよみつにおつき有

地名の配され方、特定語句の頻度、いずれも与七郎本と共通しており、これらの特性をもつものが典型的寛永期説経の道行の姿であると確認できる。

それに対し草子本の道行は、与七郎本と比べて三倍以上の分量があるにも拘らず、あげられる地名の数は、与七郎本の十八ヶ所に対し、草子本では十六ヶ所と、二ヶ所少ない。前半部であげられる地名が与七郎本と異なり、「おにがじやう」「みをがたうげ」となっている。「おにがじやう」を過ぎたあたりからは、地名を列挙する代わりに、「みちのわか草、わけゆけば。をきあまりたる。しらつゆは。かけしころもの玉かとよ」などといったように、掛詞や縁語などを用いた七五調で旅のわびしさを演出している。「かすかに、おとするものとては」以降は、物尽くしの趣向も取り入れられている。「みをがたうげ」では、関守とのやり取りが散文調で描かれた後、再び地名尽しの文体とな

り、旅の終着地「七でう、しゆしやか・ごんげんだう」に着いて結ばれる。

また、角田氏は道行文の文体の分類を試みた[8]。旅路の地名尽くしを入れて進行と旅情を表現する「正格道行文体」、地名尽くしを入れないが正格道行文体に準ずる文趣のある七五調の美文体「準格道行文体」、叙景の漢詩調の美文体「類格道行文体」、叙景の物尽くしの七五調の美文体「擬格道行文体」、それら以外の文体「非道行文体」の五種である。この分類に当てはめると、草子本の道行は「こくぶんしを立出て～ものおそろしく、すさまじや」が正格道行文体、「みちのわか草、わけゆけば～さととをげなるかねのこゑ」が準格道行文体、「かすかに、おとするものとては～みゝにさえぎる、ものもなし」が擬格道行文体、「なをゆくさきのみちすぢを。みをがたうげにせきすはる」が正格道行文体、「せきもりは、これをみて～せきのとあけてぞとをしける」が非道行文体、それ以降がみたび正格道行文体ということになろうか。

角田氏は同論文において、後期の古浄瑠璃、明暦・万治・寛文期の道行の特色を二点挙げている。ひとつは、正格文体と準格文体を組み合わせる文体構成、もうひとつは、歌謡の導入である。前者の一例として、寛文十二年刊の古浄瑠璃『小倉百人一首』の道行をあげる。

『小倉百人一首』第二段

かくとはしらて定家は、おくら山を、しのびいて、こよひあふせのなみまくら、よるへもいさや、しらくもの、山よりいつる、北しくれ、ぬれにそぬれし、わか袖を、ふりさけみれは、みね〳〵の、木々のこすゑも、あきふけて、山はにしきよ、野はきんじうを、しきたるが、ちりしくもみち、色〳〵の、色に出れと、わかこひは、しのふ山々、又ことかたに道もかな、千代のふる道つゆふかく、あらしの山、松のを、おくらのさとの夕くふり、あたこ

おろしに、ふきみたれ、月さへうつる、かつら川、はれても雨か、かさに木のはかはら〳〵、ほろ〳〵と、きぬかさ山も、程ちかく、しのひきたの、千本まつ、まつやおそしと、たと〳〵と、うほうたうにそ付給ふ

この道行文においては、二重傍線部が準格道行文体、それ以外の部分が正格道行文体といえよう。草子本の道行は『小倉百人一首』よりもいくらか複雑な構成を取ってはいるが、正格文体と正格文体の間に他の文体を挟み込むという基本構成は変わらない。

草子本の道行は寛永期説経道行とはかけ離れており、寛文期の古浄瑠璃道行と似通った特性を持っているのである。

三、「草子化」という方法

ここまで草子本と与七郎本の本文の異同について述べてきたが、それらをどう捉え、両本の関係をどう考えるべきか。それを考察するために、草子本がどこでどのように作られたのか、推論を進めていく。

浜田啓介氏は「草子屋仮説」（『近世小説・営為と様式に関する私見』、一九九三年）において、近世前期の草子屋に既成の絵草子の集積とともに草子作りのノウハウを持っていたことを指摘し、仮名草子『恨の介』の作者としてその版元たる草子屋自身を想定した。一方、秋本鈴史氏は浜田氏の論を踏まえ、寛永期の浄瑠璃本もまた、絵本や写本類の集積する場で生み出されていることを指摘している。[9] さらに浜田氏は、万治から寛文初期にかけての時期に、書肆が謡曲を読み物化して刊行する行為に注目し、諸作品のなかに複数の謡曲を取り合わせて増量し、一つの作品に仕

立てているもののあること、独自に虚構を造り、近世的趣向を加えているもののあることなどを指摘した。[10] そして同時に、それが刊行書林の営業のための所産であるものとした。

このような当時の出版界の状況を勘案すると、草子本の作られた状況もいくらか見えてくる。正本でない草子本を作る場に誰かしら説経の太夫が関わっていたとは考えられない。だとすれば、当然その本文は、太夫の語りを聞いてではなく、先行の正本を読みながら作られたことになる。前述のように、鶴屋喜右衛門は古浄瑠璃・説経正本出版の老舗であり、当然先行の説経正本の集積があったと思われる。鶴屋喜右衛門にとって、元々謡曲などに比べて長編で、複数の作品をつなぎ合わせて増量せずとも三冊仕立てにすることができる説経正本を草子に仕立て直すことは、それほど難しい作業ではなかったはずである。つまり、説経や古浄瑠璃の作品は先行正本をほぼそのまま踏襲するだけでも三巻三冊の草子を成り立たせることが出来るのである。草子本は鶴屋喜右衛門のもとで、先行正本に大部分依拠しながら草子化された本文と考えられるのである。

鶴屋喜右衛門による草子化という作業を前提とすると、草子本が寛永期の面影を残しながらも、与七郎本との間に様々な異同を持っていた理由の説明も可能になる。たとえば、命令表現や敬語表現についていえば、太夫の語りを再現する必要のない草子本において、説経特有の表現を排し、平易な語彙に改めるのはごく自然な処理といえる。一方、草子本の元になったのが万治・寛文期以降の正本で、その本が先ほど述べたような太夫の語りの変化に応じてそれらの表現を改め、それを草子本がそのまま踏襲したのだ、と考えることもできるかもしれない。しかしその場合、草子本がその他の部分で与七郎本に近い本文を持っていることの説明ができない。説経正本の本文の変化は、語彙の変化や構成の変化、本地物などの形式の変化がほぼ同時に発生しているからである。例えば、寛文本においては、前述したように段構成や後半の物語展開が変わっているだけではない。冒頭部では本地物の形式そのものが失われ、説

経特有の表現も激減しているのだ。従って、草子本の語彙の変化は、正本のそれとは別の事情、すなわち草子化によるものと考えるべきなのである。

道行に関しても同じことが言える。これも先行する正本の太夫によって寛永期の説経道行の特色を排した道行が語られたのではなく、草子本において草子屋が独自の道行を創作したのだと考えられる。

このように、「草子化」という作業によって両本間のいくつかの異同は説明が可能であるため、草子本は与七郎本を直接の典拠としているのではないかとも考えられる。それを否定する論拠となるのが先にあげた姉弟の買値についての記述である。この異同は草子化では説明がつかない。なぜなら草子本『さんせう太夫物語』における草子化とは、筋立てにおいては先行本文に忠実でありながら、実際の説経の語り口は排除し、平易で当世風な本文を作る作業であったろうと思われるからだ。主人公の買値を安く記述することにそう言った必然性は認められない。また、与七郎本を見て読み間違えたということも、「七」と「三」の間では起こり得ないように思われる。すなわち、この箇所については草子本に先行する与七郎本以外の正本の本文を想定する必要があるのである。前述のように、既に横山重氏はこの点を根拠として、草子本は与七郎本と極めて近い本文を持つ別の正本に拠っているとしたが、その説は草子化という作業を想定することによって補強できるのだ。

ただし、草子化の作業を想定してもなお、物語冒頭の本地語りの異同をどう扱うべきかは微妙な問題である。草子本の本文を草子化の結果と見るならば、草子屋が先行正本の矛盾点を自らの理解に収まるかたちに作り替えたのだと考えることができる。一方で、先行正本の時点ですでに膚の守りの地蔵像を金焼地蔵の本地と語る本文が存在していた可能性も否定できない。なぜなら、他の要素と異なり、初期説経正本間において、本地物の構造はしばしば異同が起きているからである。たとえば、五説経の一つ「おぐり判官」ではごく初期の諸本間で本地語りの構造の違いが見

られる。

御物絵巻本『をくり』（寛永頃写）

おくりのとのをは、みのゝくに、あんはちのこほり、すのまた、たるひおなことの、しんたいは、しやうはちまん、あら人かみとおいわひある、

奈良絵本『おくり』（江戸時代初期写）

をくり殿を、あいせんみやうわうとおいはひある、てるてのひめをは、むすひのかみとおいはひあつて、みやこのきたのにみたうをたて給ふて、

御物絵巻本『をくり』と奈良絵本『おくり』は、いずれも正本ではないものの、説経特有の語り口をよく残した本であり、本地譚の構造に関わる部分についても実際の語りの反映があったと考えられる。[11] 徳田和夫氏は、この二種に七太夫豊孝正本『をくりの判官』を加えた三種の諸本間での本地譚の流動について次のように論じている。[12]

この三種の本地の差異は、「聴く人の興味に適応」した結果からばかりではなく、むしろ、説経説きの意識的な語りの技術からであったように思う。即ち、語る際の時空間の状況と関係し、社寺の場所や縁日等で、説経説きが巧みに少しずつ改編し、聴聞の人々に一層の現実感を持たせたのではなかろうか。（中略）一体に、語りの技術に秀いで、物語の具体性を強調して聴聞の人々を感動せしめ、身入りの大なることを切に欲した説経説きにとっては、

北野の杜にあって、他の寺社に関わる由来縁起譚を語り、北野参詣の人々の気をそらす必要など毛頭もなかったのではあるまいか。

要するに、説経説きが語る場に合わせて本地を語る部分を自在に変えていたのが、諸本の本文にそのまま反映されていたというのである。草子本と与七郎本の本地構造の違いは、この徳田説に当てはまるケースではないものの、いずれにせよ語りの場においてそれは流動性を持つ要素だったことは確かである。従って、本地構造の違いを草子化のみによって説明することには困難を感じるのである。

以上考察してきたように、草子本の本文は寛永期の正本を草子化して作られたものであり、正本の本文と極めて近いものであると同時に、説経の語りの特色が排除された独自の性格も有していた。従って草子本は、与七郎本の欠丁部など、寛永期に語られた「さんせう太夫」の内容を知る上で有効な本ではあるが、その際、草子化が施された部分をよく見分ける必要があるのだ。

四、草子本の挿絵と万治寛文本

本章では草子本の挿絵について考察していく。

第一に指摘しておくことは、草子本の挿絵と与七郎本の挿絵との間に直接的関連は見出せないということである。挿絵の題材となる場面はいくらか一致するが、構図も画風も明らかに異なる（図1ａｂ）。

第二に、草子本の挿絵は、本文の典拠とした正本に拠ったものではないと考えられる。なぜなら、本文と挿絵との

図1a（与七郎本第二図）

図1b（草子本第七図）

間に矛盾が生じている箇所が二箇所見られるからである。その一つは上巻第五丁裏の第二図（図2）だ。これはあふぎの橋の下で野宿しようとしているつし王一行を地元の人買が脅して自分の家へ連れて行こうとしている場面だが、画面右上の短冊型の枠内には「むらをかの太夫おとす所」とある。しかし、草子本の本文中でこの人買の名は「山岡の太夫」とされている。これは現存諸本共通のこの人買の名である。より重要なのは、上巻第十一丁表の第四図（図3）だ。ここにはさんせう太夫が姉弟を買い取って、初めて対面した場面が描かれている。画面中央、太夫の前に貨幣の束が投げ出され、短冊型の枠内には「丁目十七貫」とある。これは当然、太夫が姉弟を買い取った値段だと考えられるが、前述の通り、草子本の本文でそれは「十三貫」されている。すべての現存諸本の本文と違った固有名詞が用いられている一点目については、その原因についてあらゆる可能性を否定できないが、草子本以外の諸本の本文と一致する二点目については結論を導き出すことが可能である。すなわち、草子本の挿絵は姉弟の買値を「十七貫」とする本文を持つ先行の本を典拠にしているということである。

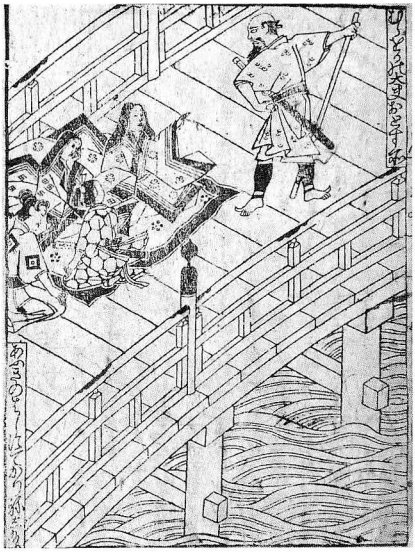


図２（左図は短冊内の拡大）

図３（左図は短冊内の拡大）

では、草子本が挿絵の典拠とした先行の本とは何か。従来から草子本との関係が指摘されているのが、[13] 東京大学図書館、大阪府立図書館に所蔵されている大型の正本で万治寛文年間頃の刊と思われる『山椒太夫』である。以下、これらを総称して「万治寛文本」とする。

草子本の挿絵と万治寛文本の挿絵にはその構図を一にするものが多く見られる（図４ａｂ）が、両本挿絵の比較を行う前に、万治寛文本の本文と挿絵との関係を確認しておく。万治寛文本の本文は、寛文本とほぼ同文である。版型が異なるので当然かぶせ彫りではないが、節章を付す位置まで一致しており、直接的関係を想定できる。ただし、挿

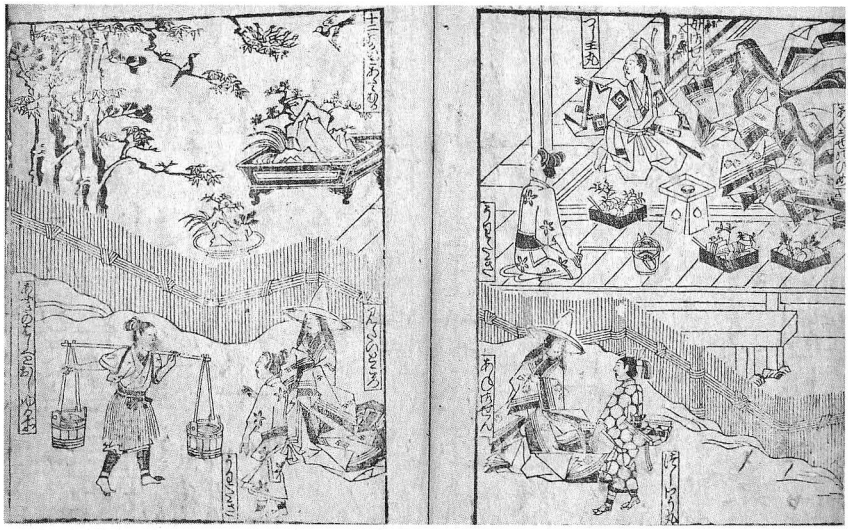


図４ａ（草子本第一図）

絵においては、構図の類似は見られるものの両本に直接的関係は認められない。そこで問題となるのが、万治寛文本の第九図である（図５）。ここには腰が立たなくなったつし王が土車に乗せられ、天王寺まで引かれていく様子が描かれている。しかし同本の本文には、先ほど見た寛文本の本文と同様に、物語の舞台としての天王寺は登場せず、つし王が土車で引かれる場面もない。この齟齬が示していることは、草子本の場合と同じである。万治寛文本の挿絵は、本文の典拠とした本とは別の本を典拠としているのだ。

草子本と万治寛文本、いずれにも挿絵と本文の不一致が見られたということは、両本と挿絵の共通する先行の本があり、しかもその本文は現存する両本いずれとも異なるものであったことを示している。

では、草子本が直接の典拠としたのは、想定される先行本なのか、それとも万治寛文本なのか。結論を先に言えば、筆者は前者と考える。その論証を中心として、以降、草子本と万治寛文本の挿絵の比較を行う。

先ほど述べたとおり、両本の挿絵は同一の構図を持つも

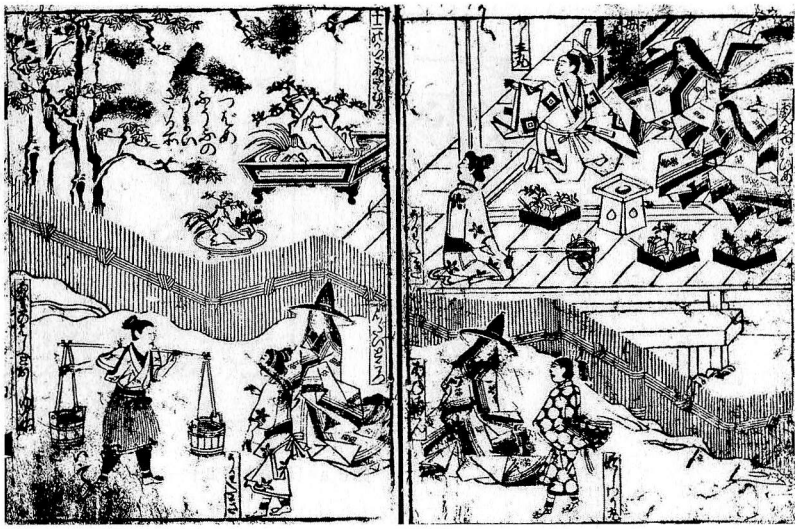


図４ｂ（万治寛文本第二図）

図５

（万治寛文本第九図）

のがほとんどだが、いくつか例外も見られる。その一例が、草子本第二十一図と万治寛文本第十四図である（図６ａｂ）。これらはいずれも、両親との再会を果たしたつし王が所知入りし、物語が大団円を迎える場面を描いている。しかし、見ての通り草子本は見開きで、万治寛文本は片面である。ただ、草子本では画面右上端に描

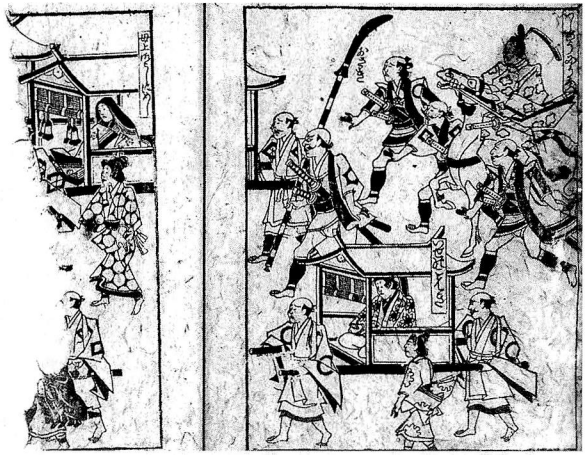


図６ａ（草子本第二十一図）

図６ｂ（万治寛文本第十四図）

かれているつし王が、万治寛文本ではまったく同じ姿で右下に描かれているなど、いずれかがいずれかを用いて作られていることは明らかである。これは、草子本の見開きの構図が元あった形で、それを万治寛文本が片面に仕立て直したと考えるべきだろう。元は片面であった挿絵を見開きに仕立て直す合理的理由はないが、見開きの挿絵を片面に仕立て直すことは、丁数を減らしコストを下げる目的で当時よく行われていたからである。その一例としてあげられるのが、慶安三年刊の古浄瑠璃正本『とうだいき』の挿絵第三図である。この本は、本文・挿絵ともに寛永十年刊の『とうだいき』に拠っている。寛永十年本では、主人公の道行が二丁にわたる下半見開きの挿絵で描かれているのに対し、慶安三年本では、それを方形で九分割し、片面の挿絵に仕立て直している。

万治寛文本には短冊型の枠に収められていない文字が散見される（図7）。枠内に収められた文字の内容が人名や「～する所」といった状況説明であることが多いのに対し、これらは人物の台詞や詞章の一節であるケースが多い。そして、これは例の土車の挿絵にも見られる。本文に描かれていない場面の挿絵に独自の加工を施すとは考えにくいため、この文字は万治寛文本が典拠とした本にあったものと想像できる。一方の草子本にはこのような文字がほとんど見られない。従って、万治寛文本に見られる文字は草子本の典拠となった本に元々あったものであり、万治寛文本もその本に拠って挿絵を作ったのだと考えることもできる。しかし、草子本の下巻終丁には刊記を削ったような痕跡が認められ（図8）、現存しているのは再印本とも考えられる。よって、再印する際に件の文字を削った可能性も否定できない。つまり、万治寛文本の挿絵の直接の典拠が草子本である可能性も残されている。この点について現時点で結論を下すことは差し控える。

図7（万治寛文本第七図）

右図拡大「おのれあつくはおとゝが／ゆくゑを申せ」とある

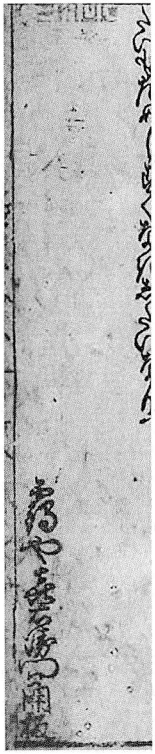


図8（草子本下巻終丁オ）「靈や喜右衛門開板」とある右部の空白に刊年などがあったか

四、結び

ここまで、草子本『さんせう太夫物語』について、書誌、本文、挿絵の三方からその特徴を探ってきた。そこから見えてきたものは、先行の説経正本を巧みに用いながら異なる性格の本を売りだそうとする草子屋の姿である。寛永期の正本をほぼそのまま用いて本文を作る。ただし、その際説経特有の語り口は排除し、道行等も当世風に作り替える。仮名草子風の大本に仕立て、本文の行数も当時の正本より少なくする。挿絵は本文と同じ寛永期のものではなく、時代の下った当世風のものを用いる。これらはすべて説経の語りの場とはまったく異なる論理の働く場＝草子屋で行われていた営為である。草子本『さんせう太夫物語』は、寛永期説経正本の面影と寛文期の草子屋の活動の一端を同時に垣間見ることのできる本なのである。

注

(1) 古浄瑠璃正本の本文については、阪口弘之「操浄瑠璃の語り―口承と書承」(『伝承文学研究』四十二号、一九九四年)、秋本鈴史「寛永期の浄瑠璃」(『岩波講座歌舞伎・文楽』第七巻、一九九八年)などに詳しい。

(2) 橋口侯之介『和本への招待―日本人と書物の歴史』(角川学芸出版、二〇一一年)

(3) 林真人「明暦二年刊『せつきやうさんせう太夫』の特徴―詞章省略の方法―」(『伝承文学研究』第六十号、二〇一一年)

(4) 岩崎武夫『さんせう太夫考』(平凡社、一九七三年)などに詳しい。

（5）横山重『説経正本集第一』附録解題（角川書店、一九六八年）

（6）蜂谷清人「命令表現「（拝ま）い」「（落ち）さい」に関する一考察」（『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』、一九七六年）、同氏「説経正本における敬語の変遷をめぐって―「さんせう太夫」の場合―」（『共同研究日本文学における中世と近世』、一九九四年）

（7）「道行文展開史論（五）―古浄瑠璃の部（三）―」（『帝京大学文学部紀要』十六号、一九八四年）

（8）同右。

（9）秋本氏前掲論文

（10）「刊行のための虚構の発生―謡曲を題材にした仮名草子について」（『近世小説・営為と様式に関する私見』、一九九三年）

（11）横山重『説経正本集第二』解題。

（12）「説経説きと初期説経節の構造」（『国文学資料館紀要』第二号、一九七六年）。

（13）（5）に同じ。

【付記】

新出した草子本上巻の所蔵者である阪口弘之先生には、上巻の閲覧、翻刻の御許可をいただいたのみならず、本論を執筆するための御指導も賜りました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

草子本『さんせう太夫物語』上巻翻刻、付『さんせう太夫物語』全巻挿絵

凡例

・翻刻に際しては、原本の表記に従った。原本には句点が施されているが、現在で言うところの「句点」である白抜の円形のものと、「ドット」である塗りつぶしの円形のものとがある。それぞれ、「。」、「．」と表記した。

・丁移りは、｜（一丁表）のように記した。

さんせう太夫物語上

そも〳〵たんごの国．かなやきちざうの御本ぢをくはしくたづね
奉るに国を申せばむつのくに．ひのもとのしやうぐんいはきのはん
ぐはんまさうぢ殿の．まほり本ぞんと聞こへける．此まさうぢ殿と
申は．御子二人もち給ふ．あね御ぜんをばあんしゆのひめ．つぎわか君
をばつしわう丸とて．五つと三つにならせ給ふ．いとしほらしく
ましませば．ふもの御てうあひなのめならず．かゝるめでたき折
ふしに．いかなるもの、ざんそうにや．いたはしやまさうぢ殿．みかど
のちよくかんかふらせ給ひ．つくしあんらくしへながされさせ給（カ）ひ

御なげきはかぎりなし．ことにあ（以下欠損）」（一丁表）

（欠損）し秋は月のまへ

にて夜□□□（をあか カ）ししいかくわんけんのみちにちやうし．御ゆうらん有

し御身なれども．御らうにんとなり給へは．とひ奉る人もなし

．されどもきやうだいの御子たちに．心をなぐさませ給ひて．

年月ををくらせ給ふ．くはうゐんはやのごとし．はや十一か年に成にける

．ある日のうちのことなるに．いつくともしらず．つばめふうふまひ

さがり．おにはのちりをふくみとり．からのなげしにすをうけて．十

二のかいこをまうけつゝ．ちゝ鳥ゑはみに立おりは．はゝ鳥かいごをあたゝむる

．はゝどりゑばみにたつおりは．ちゝ鳥かいごをあたゝめて．たがひに

やういく仕り．つれてたちはなのこえだにならびゐるを．つしわう

丸は御らんじて．なふいかにはゝごさま．あの鳥のなをば何と申と

とひ給ふ．はゝご此よし聞召．あれはときはのくによりもとび

きたる鳥なれば．つばめとも申也．又はぎばとも申也．さておん

鳥はしゝふしせつとさえづれば．あれはほけきやうの五のまきをさ」（一丁裏）

えつりて．なほう心のやさしき鳥ぞかし．あなたなるがちゝ鳥

よ．こなたなるがはゝ鳥よ．中にならびゐたるは．あの鳥の子共と

こそはをしへ給ふ．つしわう丸は聞召．あらふしぎやあのことく．天をか

くるつばさ．ちをはしるけだ物までもちゝはゝとておやをばふたり
もつものを．何とてあんじゆのひめやそれがしには．ちゝきみはな
きやらん．もしなにがしのならひにて．ろしのこうろんかさとがめ
にかけまけて．むなしくならせ給ふたか．いつがきにちぞめいにち
ぞ．ちゝにあふたるこゝちして．みはかまいりを申べし．はゝは此よし聞召
．さればこそとよつしわう丸．なんぢがちゝのいはき殿は．さるものゝざ
んそうにより．つくしあんらくじへながされて．うきしひをめされてお
はします．つしわう殿は聞召．さて今まではちゝはうきよにまし
まさぬかと思ひたるに．此よにだにもましまさばあんじゆのひ
めやそれがしには．ひまを給り候へや．みやこへ上りみかどにてどかどか（ママ）
なきよしを申ひらき．ちゝの思ひをはらしつゝ．おうしう五十四ぐん」（二丁表）
第一図（二丁裏三丁表）」
のぬしとならんとの給へばはゝは此よし聞召．なんぢきやうだい
をみやこへのぼし．みづからあとにて思ひをばせんよりも．大ぜいは
たびのわづらひ小ぜいはみちも心やすしと．めのとのうはたきのに
ようばう一人御ともとなされ．くにを三月十七日に事かりそめに
立出て．のちこうくはいとこそ聞えけれ．卅日ばかりのろしすがら
．ゑちごのくになをゐのうらに付給ふ．日もやうこくを立出．ふさう

をてらし給ひける．はやくれかたになりければ．やどゝり給へうはたき
．めのとうけ給り．なをゐ千げのところを．たび人に一夜〳〵とかる程
に．九百九十九けんほどやどやどかれど．かすものはさらになかりけり．あらい
たはしや四人の人々は．とある所にこしをかけ．さてもじやけんはういつ
や．むぶつせかいの此さとや．たび人に一やのやどをかさゞる事の□(かか)なし
さよと．なげかせ給ふ所に．はまぢよりうしほゝくんでもど□□(るにゝカ)よ
うばう．此よしもきゝ．たびの上らう様のぎよいもつともなり．これはな
をいのうらと申て．じひ第一の所にて候が．わるひものが一人二人あるに」(三丁裏)
より．ゑちごのくになをいのうらにこそ．人うりがある人かどはかしがあ
ると．くに〳〵へのふうぶん也．此事ぢとうは聞召．さてはわがなをりと
思召．しよせんたゞやどかすものが人うりよ．やどかすものがあるなら
ば．となり三げんざいくはにおこなふべきと．あれ〳〵御らん候へや．せいさつ
がたつてあるにより．思ひながらもおやどをまいらするものは御ざあ
るまひ．あれ〳〵御らん候へや．これにみえたるくろもりのしたに．あふぎ
のはしと申て．ひろきはしの候．あれへ御ざありて．一やをあかしておとを
りあれ．たびの上らう様とぞ申ける．みだい此よし聞召．これはわれら
がうぢがみをしへさせ給ふと思召．四人つれにてあふぎのはしへといそ
がるゝ．あふぎのはしにもつきしかば。むかしが今にいたるまで．おやと

子の御中ほど．よにあはれなる事はなし．北かぜのふくかたは．いつもつらし
とおぼし召．うはたきのにようばうの．かぜをふせがせ給ふ也．みなみより
しもふくかぜを．みだい所のよきにふせぎ給ひつゝ．ちきりむらこう
の御こそでを一かさねとりいだし．御ざのむしろにまいらせて．中に（四丁表）」
はきやうだいふし給ふ．これはなをいのうらのものがたり．さても爰
に．山をかのたゆふと申は．人をうりてのめいじん也．人かどはかしての上ず也
．さてもひるの上らうたちに．おやとを申そこなふてはら立や．たば
かりうりてはるすぎをせんと思ひ．女人のあしの事なれば．よも
とをくへは御ざあるまじと．わがやを出てはまぢをさしてゆくべきか．又あ
ふぎのはしへゆくべきか．まづあふぎのはしへぞいそぎける．あふぎの
はしにもつきしかば．あんのごとく四人の人々はたひくたびれにくたび
れて．ぜんこもしらすふし給ふ．まづひとおどしおどさはやと思ひ．つき
たるかせづえにて．はしのおもてをとう〳〵とつきならし．これにふし
たるたび人は．御ぞんじあつてのおやすみか．又御ぞんじ御ざないか．此
はしと申は．むかしかけての其儘に．くやうのなきはしなれば．山からは
うはばみがまひさがり．うみより大しやがあがりて．よる〳〵あふて
ちぎりをこめ．さてあかつきがたにもなりぬれば．あふてわかるゝにより（四丁裏）」
てさてこそはしのそうみやうをあふぎの．はしと申也．七つさがれば人

をとり．行がたなしとふうぶんするあらいたはしや四人の人々は．あやう
きいのちといひすてゝ．さらぬていにてかへりける．みだい所は聞召．かつ
はとおきさせ給ひて．月よかげに太夫のすがたをみ給ひてあれ
ば．五十あまりのたゆふ殿．さてかほどまでじひ有さうなるたゆふ
殿に．やとかりそんじてかなはじと．たゆふのたもとにすかりつき．なふい
かにたゆふ殿．われら斗の事ならばのにふし山をいゑとして．こらうへ
んげのもの共に．とらるゝとてもちからなし．あれ〳〵御らん候へや．これ
にふしたるわつはこそ．おうしう五十四ぐんのぬしとならふずもの
なるが．さてふしぎなるさうろんに．みやこへ上りみかどにて．あんど
の御はんを申うけ．ほんぢにかへる物ならばやはかたゆふ殿に．せちに
せりやうがおしかるべきか．一やのやどゝかり給ふ．たゆふ此よし聞より
も．やとかるまいといふとも．おさへてやどのかしたいに．やどからふと申
うれしやな．さりながらひといつはりいつはらはや思ひ．なふいかに（五丁表）」

第二図（五丁裏）」

たびの上らう様．おやとをまいらせたくは候へ共．御ぞんじのごとく．うへの
せいたうがつよければ．思ひながらもおやどをえまいらせまいとぞ
申ける．みたい此よし聞召．なひいかにたゆふ殿．これはたとへでなけれ
ども．ひちやうばうていれいは．つるのはがひにやどをめす．ちやうはく

ばうがいにしへは．うきゝにやどをめすとかや．だるまそんじやはあしのはにめす．たびは心よはなさけ．さて大せんはうらがゝり．すて子は．むらのはごくみよ．木があれば鳥がすむ．みなとがあればふねもよる．ひとゝをり一しぐれ．一むらさめのあまやどり．これもたしやうのえんときく．それによにんと申は．七日七やしのべ共．しのべばしのぶならひあり．こんや一やしのばふは．やすひ事．ひらさら一やとかり給ふ．たゆふ此よしうけ給り．おやどをまいらすまいと思へ共．あまりにぎよいのちかければ．さらばおやどをまいらする．ろしにて人にあふたり共．たゆふに斗ものをいはせて．しつかにおしのびあつて給れと．たゆふのやどへ御ともある．これはたゆふのふのよかりたる物がたり．上らう様の（六丁表）」うんめいつゝれば．ろしにて人にあひもせず．たゆふのいゑぢにおつきある．たゆふは女ばうをちかづけて．いかにうばひるの上らう様におやどを申てあるほどに．せんそくとりてまいらせて．なかのでゐへしやうじ申．はんをけつかうにもてなせと斗也．にようばう此由きくよりも．さてもたゆふ殿は．わかいおりのくせがうせたると思へば．まだうせずしてあの上らう様におやどを申さうとお申あるか．あの上らう様におやどをまいらする物ならば．みつからにはあかぬいとまとこひければ．たゆふ此由きくよりも．大のまなこにかどをたて．うばをはつたとにらんで

さてもわとのは．こんやはじめてなまだうしんぶりたる事を申もの
かな．ことしはおやの十三年にあたつて．じひのおやどをまいらするが
．それもおしいか女ばう．うは此由きくよりも．さて今まではうらふ
ためかかはふためかと思ひ申て候へば．しひのおやどゝあるならば．こな
たへ御入候へと．せんそくとつてまいらせて．なかのてゐへしやうじ申て
．はんをけつかうにもてなして．女ばうはやはん斗のことなるに．うすぎぬ（六丁裏）」
とつてかみにかけ．なかのでゐにまいり．なふいかにたびの上らう様や
どの女ばうてさふらふが．御ものがたりにまいりたよ．さてもひるおやど
をまいらすまいと申たるを．さぞにくしとやおぼすらん．われも女人
人も女人で有ながら．おやどをまいらすまいではなけれども．あの
たゆふと申は．七つの年より．人かいぶねのあひろをおし．人をうりて
のめいぢん也．人かどはかしの上ず也．されば上らう様をも．いづくの山なか
へもうり申．なさけなのたゆふや．うらめしのうばやと．お申あらふ
かなしさに．さておやどを申まいと申て御ざあるぞ．じひのおやどゝ
あるならば．五日も十日もあしをやすめておとをりあれ．それとても
御ゆだんはなされそ．たゆふがうるとしるならば．みづからしらせ申
べし．そのときに北へばし御ざあるな．みなみをさして御ざあれ．みなみ
は京かいだうにて御ざあるぞ．うれとてもごうぎの太夫が．あとを

したふて行ならば．人うりがある人かどはかしがあると．こゑをはなつてお申あれと申所を．たゆふは立ぎゝをつかまつり．さてもにくい事（七丁表）」を申物かな．なんぢがさやうに申共．たばかりうりてはるすぎをせんと思へば．よもすがらねられはせず．ぜんはよはく．あくはつよひものゝ事なれば．女ばうすこしまどろみたるまに．なふ〳〵いかに上らう様に申べし．やどのたゆふで御ざあるが．御ものがたりにまいりたよ．京へ御のぼり候は．今がはじめかとゝひければ．うんめいつきたる上らう様のいまをはじめとおかたりある．たゆふは此由きくよりも．今がはじめの事ならば．ふなぢをうる共くがをうるとも．しすましたりと思ひ．なふいかにたびの上らう様に申べし．ふなぢをめされうかくがをめされうかとゝひければ．みだいは此由聞召．ふなぢなりともくがなりとも．みちになんじよのなきかたを．をしへ給れとの御ぢやうなり．たゆふ此由きくよりも．くがになんじよはなけれども．ひとおどしおどさばやと思ひ．それくがみちと申は．びくにんころびごうしなげ．おやがしぬれど子がしらず．子がしぬれどおやがしらぬと申．くろべが四十八かしよあり．たゞ〳〵ふなぢをめされ候へや．ふなぢをめさるゝ物ならば．たゆふ（七丁裏）」がよきせうせん一そうもつて候あひだ．おきまでこぎおし．ひん□□（ぜんカ）こふてまいらすべし．とかう申まによがあけさうに御ざある．□□□（よがあカ）

けはなればやどの大事になるほどに．はや〳〵おしのひあつて給れ
や．上らう様とぞたばかりける．あらいたはしやな四人の人々は．うる共
かう共しらずして．たゆふのうちをうつら〳〵としのび出．人ののきば
をつたひつゝ．はまぢをさしてお下りある．さてはまぢにもつきし
かば．たゆふがふねにとつてのせ．ともづなとくまがをそひとて．こしの
かたなをするりとぬき．ともづなをむずときつてはなひて．あつ
はれきれめのあきなひかなと心のうちにうちいはひ．ゑいやつといふ
てろびやうしをふんでおすほどに．ふねはうきゝのものなれば．よのまに
三里おし出す．おきをきつとみてあれば．かすみのうちにふねが二そ
うみゆる．あれなるふねはあきなひぶねかれうふねかととひかくる
．一そうはえどの二郎がふね．一そうはみやざきの二郎がふねぞうと
申．おことがふねはたがふねぞ．これは山をかのたゆふがふね．あらめづ（八丁表）」

第三図（八丁裏九丁表）」

らしのたゆふ殿や．なにとさいぜん申たる．あきなひものはあるかとゝひ
ければ．それこそあれとかたてをさしあげ大ゆびを一つおつたるは．四人ある
とのがつてん也．四人あるものならば．五くはんにかはうとはやねさす．みや
ざきの三郎がこれをみて．おことが五くはんにかうならば．それがしはせん
やくそくにてある程に．一くはんまして六くはんにかはう．われかはう人かはう

とこうろんする．かたなつきにもなりぬれば．たゆふはあはてゝふねに
とんでのりてなうつそ鳥のたつに．ことに此鳥わかとりなれば．すゑ
のはんじやうするやうに．りやうはうへうりわけてとらすべし．まづゑど
の二郎がはうへは．年ましがねがするほどに．上らう二人かうてゆけ．又み
やさきの三郎がはうへは．わかきものがねがするほどに．きやうだい二人
かうてゆけ．まけて五くはんにとらするぞと．又わがふねにとんでのり
．なふいかに上らう様．いまのこうろんはたれゆへと思召．上らう様ゆへにて
御ざあるぞ．二そうのふねのせんどう共は．たゆふがためにはおいども也．おぢ
のふねにのりたるたび人を．われをくらふ人をくらふとこうろんする人（九丁裏）」
のきにあふはやすき事．さともひとつ．みなともひとつの事なれば
．ふねのあしをかるふめされ．るいせんめされ候へや．まづ上らう二人は．あの
ふねにめされ候へ．おことときやうだいは．此ふねにめされ候へと．たゆふはれう
そく五くはんにうちうりて．なをいのうらにぞかへりける．ことにあはれ
をとゞめしは．二そうのふねのうちとかや．五町ばかりはるいせんする．十町
ばかりも行過て．北とみなみへふねがゆく．みだい此由御らんじて．さて
あのふねと此ふねの．あひのとをきはふしぎやな．おなじみなとへつくな
らば．ふねこぎもどしてしづかにおさいよせんどう殿．何と申ぞけさあ
さゑびすをいはひそこなひ．かいまけたるだにもはらのたつと思ふ

に．上らう二人はかうてあるぞ．ふなぞこにのれと斗也．みたいは此由聞召
．やあ〳〵いかにうはたきよ．さてうられたとよかはれたとよ．なさけなの
たゆふやな．うらめしのせんどう殿や．たとひうるともかうたる共
．ひとつにうりてはくれずして．おやと子のそのなかを．りやうはうへ
うりわけたるかなしやな．みやざきのはうをうちながめ．やあ〳〵いかに（十丁表）」
きやうたいよ．さてうられたぞかはれたぞ．いのちをたばへきやうだい
よ．いのちがあればくらげもほねにあふとやれ．又も御よにはいつまいか
．あねがはだにかけたるは．ぢざうぼさつてありけるぞ．しぜんきやう
だいが身のうへに．大じのあらんそのときは．みがはりにもおたちある．ぢざ
うぼさつておはします．よきにしんじてかけ給へ．又おとゝがはだにかけ
たるは．しだたまつくりのけいづの物．しゝてめいどへゆくおりも．ゑんまのま
へのみやげにせよ．それおとすなつしわう丸と．こゑのとゞくところで
は．とかくの御物がたりをお申ある．しだいにほかげはとをくなる．こゑのと
どかぬ所では．こしのあふぎをとり出し．ひらり〳〵とまねかるゝ．まねくに
ふねもよらばこそ．けさゑちごのくになをいのうらにたつなみが．わう
しやうのくもとへだてられ．わが子みぬこそかなしけれ．かのうとふやすかた
の鳥だにも．子をばかなしむならひあり．なふいかにせんどう殿．ふねこぎ
もとしてこんじやうにてのたいめんを．今一どさせて給れの．せんどう殿

との給へは．せんどう此由聞よりも．なにと申ぞ一と出したるふねを．あと（十丁裏）」

第四図（十一丁表）」

へはもどさぬはうぞかし．ふねぞこにのれと斗也．うはたきのにようばう此

由をうけ給り．けんしん二くんにつかへず．ていぢよりようぶにまみへす．二

ちやうの弓はひくまじと．ふなばりに立あがり．たもとよりしゆへんのし

ゆじゆをとりいだし．にしにむかつて手を合．かうじやうにねん仏十へん

はかりとなへつゝ．なをいのうらへ身をなげて．そこのもくずとなり

給ふ．みだい此由御らんじて．さておやとも子共きやうだいとも．たの□□思（みたに方）

ひしうはたきは．かく成はてゝかげもなし．わが身はなにとなるべ□□天（きと方）

にあこがれちにふして．りうていこがれ給ひける．こほるゝなみだをおしと

どめ．ちぎりむらごの御こそでをひとかさねとり出し．なふいかにせん

どう殿．これはふそくに候へども．これはけさのしろもつ也．さてみづから

にもひまを給り候へや．身をなけんとの給へば．せんどう此由聞くより

も．なにと申ぞ一人こそはそんする共．二人までそんにはすまいとても

つたるかいにてうちふせ．ふなばりにゆいつけて．ゑぞがしまへぞうりた

りける．ゑぞがしまのあき人は．のふがないしよくがないとて．あしてのす（十一丁裏）」

ぢを立きりて．日に一がうのしよくをぶくし．あはの鳥をおふておはし

ます．これはみだい所のなれのはて．ことにあはれをとゞめしは．みやざきの

三郎が．きやうだいの人々を二くはん五百にかいとりて．こゝかしことうる
ほどに．たんごの国ゆらのみなとのさんせうだゆふが．しろをつもつて十
三ぐはんにかうたるは．たゞしよしのあはれと聞えける．たゆふは此由御らんじ
て．さてもよきふだい下人をかいとる事のうれしやな．まごひこのす
ゑまでも．ふだいのものとよびつかはん事のうれしやと．よろこぶ事
はかぎりなし．ある日のうちのこと成に．きやうだいをおまへにめされ．やあ
いかになんぢら．此内にはなもなきものはつかはぬが．きやうだいがなを
ばなにと申ととひ給ふ．あねご此由聞召．さん候それがしきやうだい
は．これよりもおくがた．山中のものにて候へば．あねはあね．おとゝは〳〵と
申てつゐにさだまるなも候はず．只よきなをつけておつかひあれ
．たゆふ殿．たゆふ此由聞召．さてもなんぢは．げにもなる事を申物かな．
其ぎにてあるならば．なんぢが国さとはいつくぞ．くになをつけてよ（十二丁表）」
ばうとの御ぢやう也．あねご此由聞召．さん候それがしきやうだいは．だて
のこほりしのぶのしやうのものにて候が．国を三月十七日．ことかりそめ
に立出て．ゑちごのくになをいのうらからうりそめられ．こゝかしこと
うらるゝほどに．それがしあまりのものうさに．しづかにかぞへてみてあれ
ば．此たゆふ殿までは．七十五手にうられたが．あなたにてはしろ物よ．こ
なたにてはあきなひものよとこそ申され．つゐにさだまるなも候は

ず．よきなをつけてつかひ給へたゆふ殿．たゆふ此由きくよりも．其ぎにてあるならば．だてのこほりしのぶのしやうをかたどりて．あねがなをばしのぶとつくる．しのぶにつくはわすれぐさ．よろづのことを思ひわすれて．よきにほうこうつかまつるやうに．おとゝがなをばわすれ草とつくるなり．まづあねのしのぶ．みやうにちにもなるならば．はまちにさがりしほくみてまいるべし．又おとゝのわすれぐさは．日に三がのしばをかりてまいれとて．五かう天もひらくれば．かまとおうこと．おけひしやくを．きやうだいに出さるゝ．あらいたはしやきやうだいは．わざのだうぐをうけとりて．山とは（十二丁裏）」

第五図（十三丁表）」

まとのみちすがら．くどきごとこそあはれなれ．山へまいるかおとゝよ．はまへまいるぞさらばとて．いとまごひをし給ひける．あらいたはしやあねごは．とあるところに立やすらひ．おけとひしやくをからりとすて．山の方をうちながめて．みつからは此めのまへにみえたるみちくるしほさへえくまぬに．かまをとりたる事はなし．はえたるしばもえからずして．みねのあらしやたにかぜに．袖ももすそもふきかへし．さぞさむからんかなしやと．あねはなげかせ給ひけり．又おとゝのつしわう殿は．あるいはかどにこしをかけ．はまのかたをうちながめ．あのしらなみのたちゐにも．めなみおなみがうつときく．よするおなみをうたせては．めなみのしほゝ

くむとかや．めなみもおなみもしらずして．おけひさくをなみにな
がし．ふくはま風やさむからんと．その日はきやうだいの人々．山とはまと
になきくらす．かゝりける所に．山人たちはしばをかりてかへるとて．つし
わう殿をみまいらせ．これなるわらんべは．さんせう太夫のみうちなる．今
来りのしばかりか．山へゆきしばからずしてかへるならば．じやけんなる（十三丁裏）」
たゆふ三郎がせめころさんは一ぢやう也．それ人をたすくるは．ぼさつの行
にてあるぞかし．いざやしばをくはんじんしてとらせんといふまに．しばを
少つゝかりあつめ．やう〳〵三がにつがねつゝ．つしわう殿にまいらする．つ
しわうはよろこびて．になはんとはし給へ共．いまをはじめの事なれば．も
ちかねたるていを見て．人々あはれと思召．おもにのうへにとりそへて
．あすみがはまゝで出し給ふ．さればおもにゝこづけとは．其時よりも
申とかや．あらいたはしやつしわう殿は．三がのしばをはこばるゝ．じやけん成
三郎がこれをみて．わつはをかたてしばをかたてにひさげつゝ．なふいかに
太夫殿に申へし．いまゝいりのわつはが．かりたるしばを御らん候へ．たゆふ此由み
るよりも．さてもなんぢはしばをえからぬと申が．しばをえからぬ物
ならば．もと口がそろはいで．もんどりうたせてたばねうが．さてもうつく
しくかつたよな．これほどしばの上ずならば．三がはむやく．三がのしばに七か
まし．十かかれ．それほどからぬものならば．なんぢがいのちはあるまいと

ぞせめにける．あらいたばば(ママ)しやつしわう殿は．もんぐはいに立出て．あねごを（十四丁表）」
まちておはします．あらいたはしやあねごぜんは．もすそはしほ．袖はなみだ
にしよぼぬれて．おけいたゞきてかへらるゝ．ころもの袖にすがりつき．な
ふ〳〵いかにあねご様．それがしはけふのしばをえからずして．山人たちのなさ
けにかつて給りしを．さても上手にかりたるとて．三かのしばに七かまし
．十かかれとよかなしやな．三がにわひて給れや．あねご此由きこし召．さの
みなげくなつしわう丸．さてみづからもけふのしほゝばえくまいで．あま
人のなさけにくんで給り．けふのやくはつとめたが．あすをばしらぬぞつし
わう丸．うけ給れば此みうちに．五人御さある子共たちの中に．二はんめ
の二郎殿と申は．じひ第一の人ときく．此御かたに申つゝ．しばを三がにわびてと
らすべしと．きやうだいつれてたゆふ殿にかへりつゝ．しばを三がにわびた
まふ。じやけんなる三郎がこれをきゝ。なふいかにたゆふ殿。さてもきのふ
のしばを。わつはがかりたと思ひたれば。山人共かすゑもとげぬしばと
きいてあり。ゆら千げんをふれ申さんとて。三郎がふるゝやうこそお
そろしけれ。さんせう太夫のみうち成。いまゝいりのひめとわつはにしば（十四丁裏）」
をかりしほくんでとらせたらんものは。となり七けんりやうむかひざいくは
におこなふべしとふれたる三郎を。おにかといはぬものはなし。いたはしやつしわう
殿は。三郎がふれをもしり給はす。又きのふの所へおはしまし。山人たちの

しばくはんじんして給れかしと思召。立やすらふてゐ給ふが。山人共はこれ
をみて。なんぢにしばを少づゝ。おしむものはなけれども。あのしやけん
なるたゆふ殿から。ふれがまはりてあるにより。思ひながらもしばをかり
てまいらするものはあるまじ。かうもつてかうかる物よとて。かまでをし
へてみなとをる。いたはしやつしわう殿は。心よはくてかなはじと。もちたるか
まをとりなをし。何木とはしらね共。木をば一ほんきりたるが。こなすほ
うをしらずして。よはりはてゝぞおはしける。それ人のちやうみやうは
永(カ)くて百さい申せ共。それがしは十三を一ごとせんと思召。まほり刀の
ひほをときじかいをせばやと思召が。まてしばしわが心。あねごに此事
しらせずはむなしく成し其あとにて。さこそやうらみ給ふらん。いとまを
とはゞやと思召。はまぢをさして下らるゝ。いたはしやあねごぜん。おつる（十五丁表）」

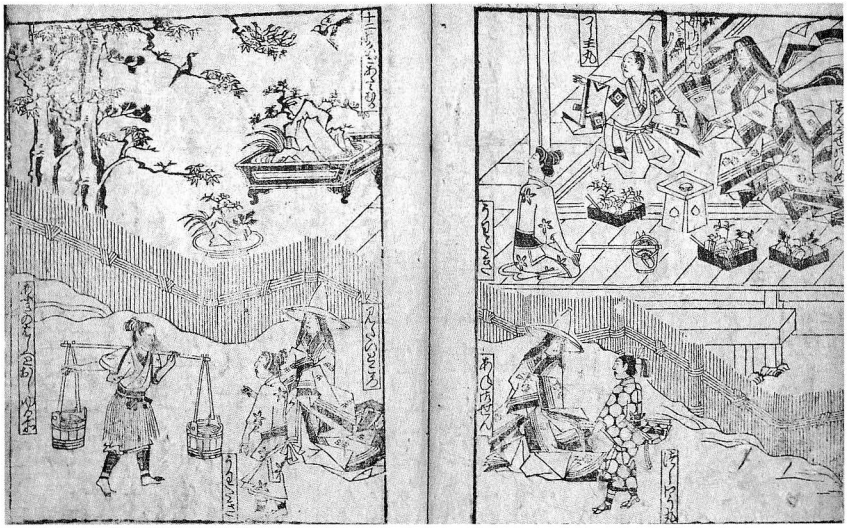
第六図（十五丁裏）」

なみたに袖ぬれてしほゝくんでおはしますころものたもとにすかり付
なふいかにあねご様それがしは山にてしかいせんと思ひたるが御身になこり
おしくしてこれまて来り候そや今をわかれとの給へばあねこせんは聞
召さてもなんぢはおのことてしがいをせんと思ふかやみつからも思ひき
り身をなげんと思ひしが御身になこりおしまれて今まてまちえ
てうれしやな其きにてあるならばいさもろ共にみをなけんとたもと

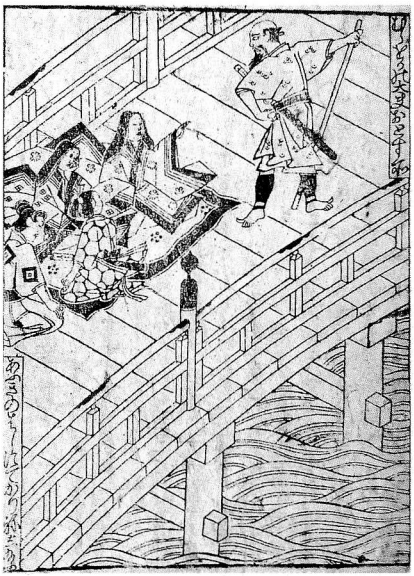
に小石をひろい入いはのはなにあかりつゝやあいかにつしわう丸なんちは
みつからをなをいのうらにてわかれたるはゝごをおかむと思ふへし又みつか
らは御身をばつくしあんらくじにおはしますちゝごをおかむと思ふへしと
たかひにめとめをみ合てすでになけんとし給ふところにおなじ
うちにつかはるゝいせのこはぎがこれをみてやあ〳〵いかにきやうだ
いよいのちをすつるとみえてありそこつなる事し給ふないのちを
またふもつかめはほうらいさんにあふときく又も御世にや出給はん
いのちをたはふ物ならばみつからがせんぞをかたりてきかすべしみつから（十六丁表）」
と申はあのたゆふ殿につたはりたるふだい下人にても候はず。国を申
せばやまとの国うだのものにて候が。けいほの中のざんにより。いせの国
二見のうらからうられきて。あなたこなたとうらるゝ程にあまりの事
のものうさに。つきたるつえにきさをしてかずをとりて見てあれば
。此たゆふ殿まで。四十二てんにうられたが。ことし三とせのほうこうをつ
かまつるはじめからはならはぬぞ。ならへばなるゝならひあり。しばをえか
らぬものならばしのび〳〵にみづからが。しばをもかりて参らすべししほ
をもくみてまいらすべし。いのちをたばへとの給ひける。あねご此由聞
召。されば其しよくがならぬゆへ。命をすてんとの事なれ共其しよくだ
にもなるならば何とて命すつべきぞ。其ぎにてあるならば。けふ

よりもたゆふのうちに。あねをもつたと思ふべし。おとゝをもつたとおぼしめせとて。はまぢにておとゝひのけいやくをめされ。兄弟つれ立て。太夫殿におかへりある

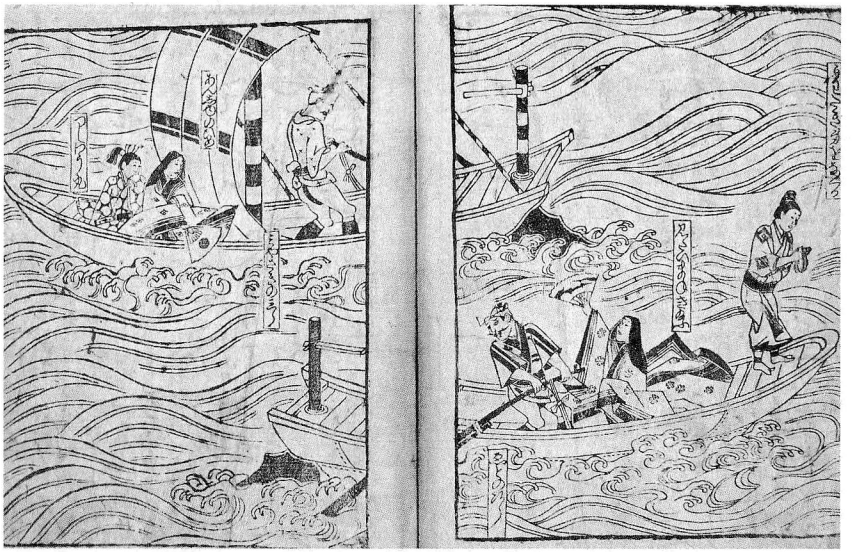
上終（十六丁裏）」



第一図（上第二丁裏第三丁表）



第二図（上巻第五丁裏）



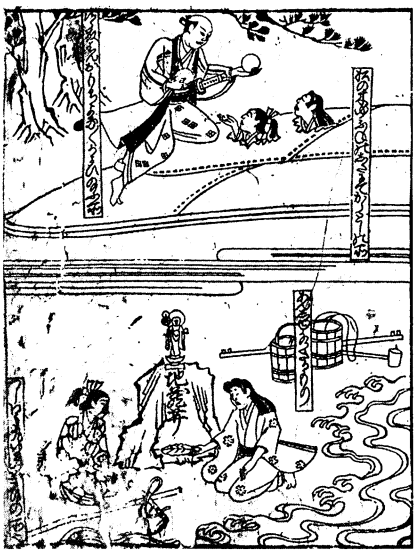
第三図（上巻第九丁裏第十丁表）

第五図（上巻第十三丁表）

第四図（上巻第十一丁表）

第八図（中巻第三丁表）

第六図（上巻第十五丁裏）



第九図（中巻第五丁表）

第七図（中巻第二丁裏）

第十二図（中巻第十一丁表）

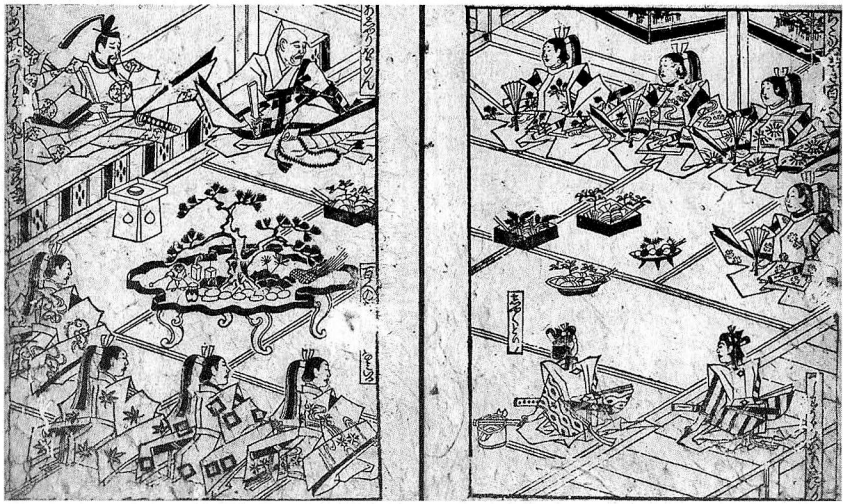
第十図（中巻第七丁表）

第十三図（中巻第十三丁表）

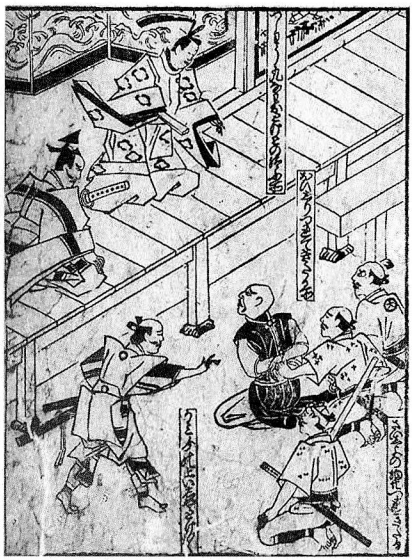
第十一図（中巻第九丁表）

第十四図（中巻第十五丁裏）

第十五図（下巻第一丁裏第二丁表）



第十六図（下巻第四丁裏第五丁表）

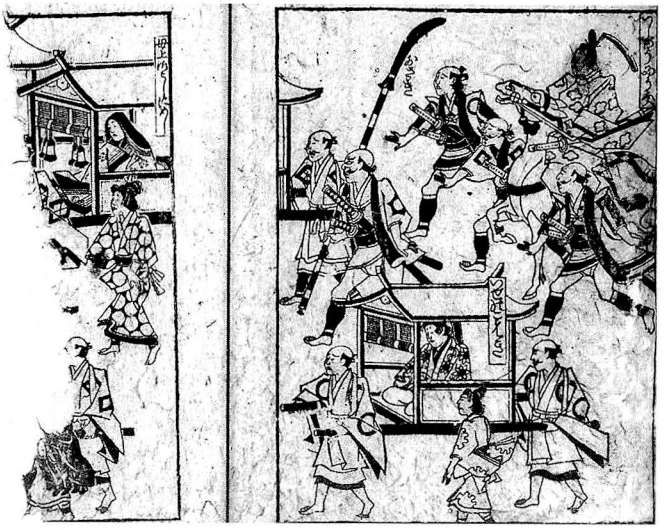


第十八図（下巻第九丁表）

第十七図（下巻第七丁表）

第二十図（下巻第十二丁表）

第十九図（下巻第十丁裏）



第二十一図（下巻第十三丁裏第十四丁表）